フィールドからの問いかけ

森 明子
総合研究大学院大学助教授地域文化学専攻／国立民族学博物館助教授

「異様なものの観察」と「全的な変動の経験」

フィールドワークとは、研究対象となっている地域または社会へ研究者自身がおもむき、その地域または社会に関し何らかの調査を行うことを意味する。人類学の場合、その滞在先は非西欧世界で、滞在期間は数年にわたるものが多い。フィールドワークを終えた人類学者は、その社会・文化についての研究書を叙述する。これが民族誌である。多くの民族誌が蓄積されると、それを比較分析することによって、より一般性のある理論が構築される。こうして構築された理論は、さらなるフィールドワークを喚起し、それがまたさらなる理論研究を促す。

人類学の研究は、このようにより具体的な民族誌研究と、より抽象的な理論研究の相互的な関係からなっている。フィールドワークは、その双方にかかわって人類学の中核的な位置を占めていて、学そのもののスタンスと奥深いところで結びついている。以下では、人類学におけるフィールドワークについて考えていきたい。

レヴィ・ストロースは、人類学（民族学）を、「人間の問題への哲学的接近と科学的接近のギャップを架橋する手段」と位置づけて、次のように述べている。

> 人類学あるいは民族学をかけがえのないものにしているのは、それがフィールドワーカーのうちにつくりだす拘束の種類にある、と私は感じています。それは…顕微鏡でハエの脚をのぞくように、何か完全に異様なものを観察するだけではありません。それは個人として、また大抵は自分自身の文化と文明の代表者として、人格的にかかわりあうようになること、まったく異なった文化の理解につとめることからくる全的な変動を経験することなのです。（スタイナー 1966）

観察と経験の双方を1人の人類学者が行うこと、その際、経験を生活のレベルまで徹底させ、人格的にかかわりあうことが、人類学のフィールドワークのユニークなところである。それにしても研究者の個人的な経験が他の人に共有され、学問分野として成立するのは、どのような仕組みによるのか。

民族誌とフィールドワーク

フィールドワークは、民族誌という形をなすことによって学問分野の中に位置づけられる。民族誌は、個別の社会・文化について叙述するものであるが、同時にそれを通して人間の社会的行動一般について洞察する研究書でもある。1人の研究者のフィールドワークが他の人に共有される状況は、このような民族誌の独自の仕掛けによっている。

この民族誌の仕掛けのことを、ストロースは、フィールドワーカーのうちにつくりだされる「拘束」と表現したのである。同じことをエドマンド・リーチは、「内省」と表現している。フィールドワークの途上にある人類学者は、「初めの

豚の屠殺（オーストリア、ケルンテン州の農村）

羊毛を紡ぐ女性（オーストリア、ケルンテン州の農村）

うちは他の人々を奇異なものに感じるが、やがては彼らの“奇妙さ”の中に我々自身の鏡像を認めるようになる」（リーチ 1985）。人類学者は、内省を通して自己を相対化する思考を経験しているのであり、その思考のプロセスが、民族誌に人間社会を洞察する力を与える。

だが、やみくもに人類学者の内省を強調することは危険である。人類学者の主体的経験を強調することは、一方でフィールド（対象社会）の人々の意思や主張を過小評価する傾向を内包するからだ。1980年代以降の人類学界は、このような傾向を自覚し、フィールドワークや民族誌記述は誰のためのものであるのか、批判的な議論を展開してきた。

現代人類学の問題意識において、フィールドワークは人類学者とフィールドの人々との相互的な関係が形成され、展開していく過程として把握される。この相互関係の中から、人類学者は新しい問題を発見し、領野を切り拓いていこうと努力するし、フィールドの人々には自らの問題を意識化し、それを主張していくことも期待される。

このような問題意識は、フィールドの世界と研究者が帰属する世界の関係が、大きく変化してきたことと関連している。20年ほど前まで、人類学のフィールドは島のように閉じた世界として認識され、そこで行うフィールドワークも、人類学者の日常から切り離された、明確な輪郭をもつ調査活動と考えられていた。だが現在の認識では、フィールドの社会も、人類学者が日常帰属している社会も、ともに現代の世界システムの内部に配置される。このような認識のもとに、人類学者が研究対象とする社会やそれへのアプローチも、多様になってきた。人類学者は、非西欧の非都市的な社会ばかりを研究対象とするわけではなくなったのである。

フィールドワークの過程

私の経験に沿っていくつか述べていこう。私はオーストリアの農村をフィールドとし、数回の滞在と数編のモノグラフを発表して10年ほどしたころ、ひとつの民族誌をまとめた。その後、ベルリン調査に着手しているが、村での調査も続行していて、その後の変化を追っている。私がヨーロッパ社会を研究対象として選んだのは、フィールドワークというアプローチを通して、他者として、ヨーロッパの生活文化を研究することは可能か、ということに関心をもったからである。以下では、ヨーロッパのフィールドワークがいかに展開していったか、オーストリア農村調査の一端を示そう。

私の民族誌は、農村の名誉の体系を軸のひとつとした。このテーマは、経済的社会的変化を経験している農村でフィールドワークを重ねていく過程で、次第に形をなしていったものである。

契機になったのは、数年をおいて2度経験した、私にとって理解不能な会話であった。ひとつは「職業（ベルーフ）」という語をめぐる行き違いで、「自分には職業はない」という働き者の男性の発言に起因していた。もうひとつは「勤勉／怠惰」の語の用法についての不理解で、「労働者は（労働者だから）怠惰だ」という信心深い農家の主婦の発言だった。これらは会話の中で思わず出てきた一言だったが、そ

の意味を理解できない私を、相手は理解できなかった。説明のしようがない不理解だった。

二つの経験がともに農村の名誉の体系に関わっていると思い至ったのは、数年たってからである。これらの語の背景に、農村の社会階層、財産所有、相続慣習、家族関係、職業教育、労働観、人格の概念、社会変化への対抗、といったものが複雑に絡み合っていることを理解したのである。私の調査は、すでに数年にわたって、これらのそれぞれについて進めていた。たとえば相続について、一般的慣行を文献にあたり、長期的な変遷を土地台帳で遡り、ローカルな慣習とその実践についてはライフヒストリーを聞き取る、などのことをしていた。また、家族関係については、教区簿冊とライフヒストリーを交差させて再構成する試みなどを重ねていた。

これらの知識を蓄積し、繰り返し問い直していくうちに、かつて経験した気まずい経験が思い起こされ、やがて名誉の体系というべきものが見えてきたのである（詳しくは、森 1999）。こうなると、2度の経験は重要なものになった。またこうした理解を介して、M.ウェーバーやK.マルクスの理論が、私の中で立体性を帯びてきて、これらのモデルに自分がどう対するか、距離感のようなものもできたのである。

ところで「職業」をめぐる不理解は、村を訪れて半年ほど経過したころの経験で、そのころの私は、まだフィールドの人間関係づくりに手間取っていた。時間がかかった最大の要因は、人々の私に対する警戒心だったが、それと同時に、村の人と話をするためのローカルな知識が私には不足していた。具体的には、固有名詞や独特の代名詞、副詞の用法をめぐる勘のようなもので、それがなければ質問すらできなかった。その一方で、未熟な当時の経験の中にも、「職業」のように後になって重要な意味をもつ経験が確かにあった。

フィールドワークの進め方は、研究者により、またフィールドによってさまざまである。博士論文執筆を目的とする大学院生のフィールドワークであれば、1年から2年の調査を終えてまとめることになるし、大都市で調査する場合には、村とは異なるアプローチが必要になる。

現代世界のフィールドワークと人類学

グローバルな規模で政治・経済が展開し、高度な通信技術が浸透している現代世界で、フィールドワークの進め方にも変化が起こり、その位置づけがあらためて考えなおされるようになってきた。だがそれでも、人類学者に「フィールドワークの経験」を求める傾向は依然として強い。現代の人類学はフィールドワークに何を求めているのだろうか。

私は、フィールドワークが現代の人類学に対してもつ意味は、人類学者が、フィールドで内省と相対化を行いつつ、フィールドの人々との相互的な関係の中から思考を立ち上げていく過程そのものにあると考える。人間の社会行動で何が問題であるのか、それはどのような文脈でどのようにあらわれるのか、これらの問いを、人類学はフィールド発の視点から問いかけていく。現在、人類学の研究対象は以前にもまして多様なものになっているが、その背後には、このような思考のプロセスが存在していると思う。この思考のプロセスを胚胎するものは、一見奇異に見えるものであっても、人類学のフィールドとしてとらえられるのである。

バラウォイがまとめているように、ポストモダンの現代世界とは、近代が築き上げた時間と空間に関する秩序を新たに編成しなおしている過程ととらえることができる。そうであればこそ、現代世界を民族誌的に研究することの意味は大きい。そしてそれは、他者をその時間と空間において研究することを仕事としてきた、人類学者のすべき仕事なのである（Burawoy 2000）。新しい秩序を模索する現代世界に、人類学は、フィールドから立ち上げていく思考のプロセスとその実践を提示することにおいて貢献する、と私は考えている。

森 明子（もり・あきこ）
ドイツ、オーストリアをフィールドとする。学部学生のときに文化人類学に関心をもって、大学院から飛び込んだ。地域に対する関心よりも、ものの見方に関心があった。ヨーロッパは人類学の対象外、という暗黙の了解が以前はあり、そのこと自体に関心を持ってフィールドにしてしまった。人類学はアマチュアの部分をもつ学問だと思う。それを自重する一方で、大切にしたいとも思っている。

[引用文献]
・Burawoy, M. ,*Global Ethnography: Forces, Connections, and Imaginations in a postmodern World*, University of California Press, Berkeley (2000).
・リーチ、E.『社会人類学案内』岩波書店（1985）
・森 明子『土地を読みかえる家族―オーストリア・ケルンテンの歴史民族誌』新曜社（1999）
・スタイナー、G.「レヴィ=ストロースとの対話」『みすず』86号（1966）